

桃源郷は探すものではなく、 つくり上げるもの

ゲスト●探検家・医師

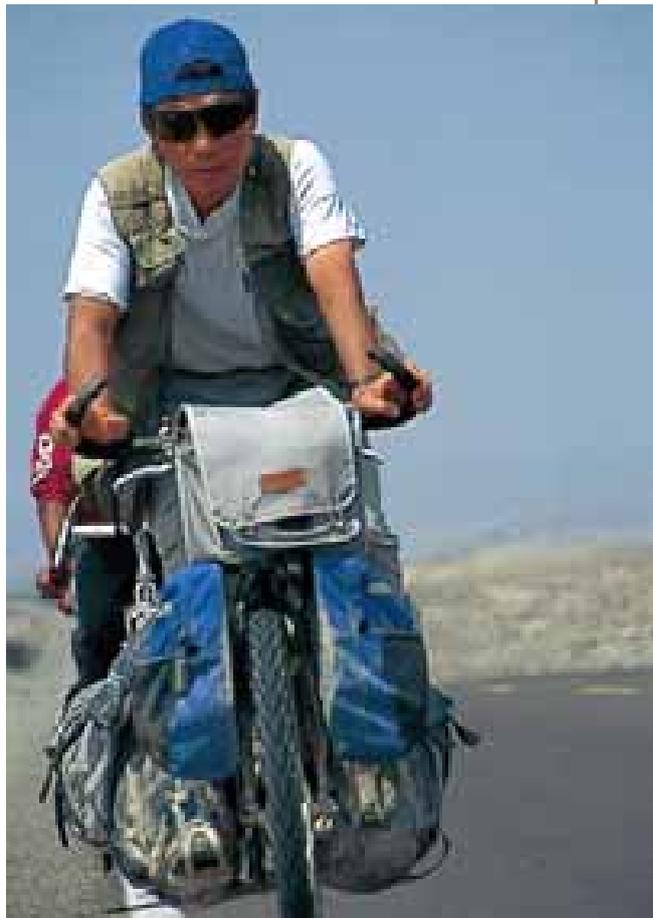
関野吉晴氏

迷ったら、腹をくくって
ジャンプする

—グレートジャーニーなど、数々の探検をされてきました。冒険好きな少年時代を送られてきたのでしょうか。

5人兄弟の末っ子だった僕は、可愛がられ、過保護に育てられました。山に登ると言えば、危ないからやめろ。アルバイトしたいと言えば、余計なことはするな。父親が小学校の校長だったこともあって、とにかく厳格でしたね。だから逆に自立したい、好きなことしたいという気持ちは本当に強かった。

僕は生まれも育ちも東京の下町、墨田区です。周りには零細な工場群があって、そこでは集団就職で上京してきた同年代の若者がたくさん働いていました。彼らは親元から離れて寮生活をしている。それがうらやましくてしょうがなかったんですね。でも、こっちは親のすねをかじっている身だから、わがままは言えない。ただ、大学に入ったら、たとえ勘当されても好きなことを思いっきりやろう。そう決めていました。



グレートジャーニーの移動手段は人力のみ。写真はヘルーにて
©グレートジャーニー

だから入学後は4人部屋で3食付き2500円のボロボロの寮に入り、授業料も奨学金でまかない、アルバイトをして生活費を稼いだ。そうやって自立して、自由を手にしたことが嬉しくて仕方なかったんですね。

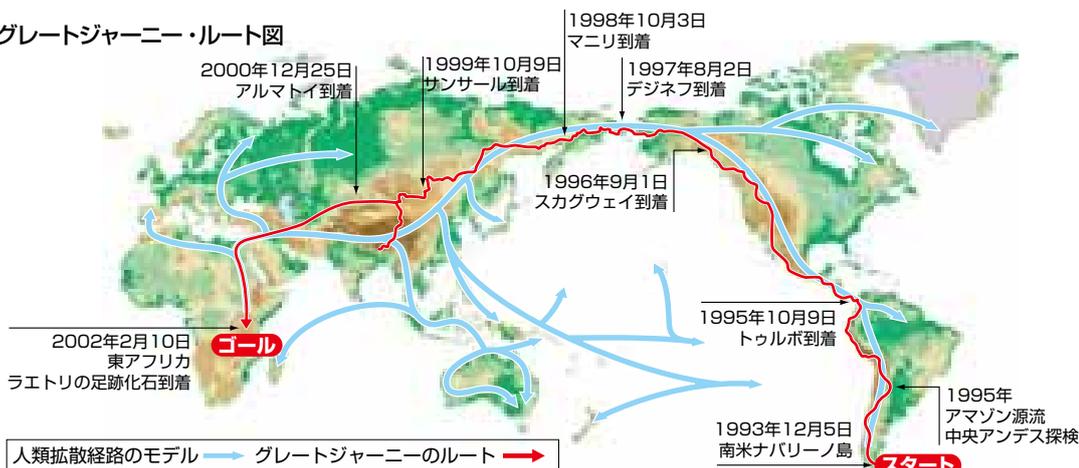
旅に出ようと考え始めたのは高校時代から。というのも、そのころの僕は自分の生涯をかけるべきものが見つかっていなかった。でも、これは無理といえば無理な話なんです。学校と家の往復だけの毎日では世界が狭すぎる。もっと広い世界に、しかも

全く対極にある文化に自分自身を放り込んでみたら、気づかなかった自分が見えるんじゃないか。そう思ったんです。

—最初のアマゾンの川下りは1971年。怖さはありませんでしたか。

当時、アマゾンについての情報はほとんどありません。でも、だからこそ面白いと思えた。僕は人一倍臆病なんです。ただ迷ったときは、「行っちゃえ」と腹をくくってジャンプする。そのときいつも感じるのが、「これで自分の人生はもっと面白くなるんじゃないか」という期待。怖いし、迷いもた

グレートジャーニー・ルート図



グレートジャーニー：東アフリカで誕生した初期人類は、数百万年をかけ、進化を遂げながら南米大陸まで移動・拡散した。その軌跡を英国の考古学者ブライアン・フェイガンが「グレートジャーニー（大いなる旅）」と命名した。関野さんは、南米からアフリカまで5万キロに及ぶルートを人力で、足かけ10年かけて遡った。

らいもありますが、ジャンプして後悔することは少ない。やってしまつたら、それはそれで仕方ないわけですから。

世界は川と森でできている

——世界中を旅したグレートジャーニー。常識をくつがえされるような土地はありましたか。

10年も旅を続けましたが、実はそれ以前に通っていたアマゾン以上の驚きはありませんでした。やはりあそこは特別な場所。世界中のどこにも見つからなかったのは、自然と一体となったあの独自の世界観ですね。世界の99%の人は世界地図を知っていますよね。大陸があつて、海があつて、砂漠がある。たとえ内陸のモンゴル人であっても、海は見たことがなくても、その存在は知っているでしょう。けれど、僕が接触したアマゾンのマチゲンガ族は海も砂漠も知

らない。地球が丸いことも知らない。彼らにとつて世界は川と森でできている。そして、自分たちの暮らす川についてはすべて知り尽くしています。どこに魚がいるか、薬草が採れるか、動物が獲れるか。けれど、隣や、隣の隣の川についてはあまり知らない。自分たちの川が世界のすべてでなんですか。

だから僕が行ったときにもまず、「おまえはこの川から来た」と尋ねられました。当時、僕は東京の国立市に住んでいたから「多摩川」と答えると、「そこに魚はいるのか？ どんな動物がいるのか？」と聞かれる。「ここほど魚や野鳥はいない」と言うと、かわいそうにと同情されましたけどね(笑)。

競争や支配と無縁の人々

——アマゾンの人々と私たちの最大の違いは何だとお感じですか。

競争がないこと。これが我々の社会と最も違う点です。一番になることに意味がない。獲物を誰が捕っても、結局はみんなに分け合うのですから。

もともと物質的に平等な社会なんです。持っているものはすべて自然から採集して自分でつくる。土地に関しても、何か大いなるものが支配しているものであつて、決して自分たちのものではない。物質的に差がつかないわけです。

物が余ってあればすぐにくれるし、使っていないのであれば気軽に貸してくれる。物が必要な人に流れる社会なんです。

——私たちの社会とはまさに正反対といえますね。

もうひとつ、彼らの大きな特徴だと僕が考えているのは、「ヘラヘラ主義」。アマゾンのマチゲンガ族は、他の先住民やインカ、さらにはスペイン人などが侵略してきて

徹底抗戦はせず、それを受け入れ、ヘラヘラしてでも上手に生き抜いてきた。精神的プライドより生きるという実利を取った。

ふつう、そうした生き方はこびているようで悪いイメージですよね。でも、誰かを支配して搾取に頼って生きるより、彼らのほうがよほど自立しています。我々の社会も学ぶところは大きいにあると思う。

——世界を旅して、住んでみたい理想の土地はありましたか。

「住みたい土地はありますか」という質問はよくされますが、それは「桃源郷はありませんか」ということですよ。答えはノーです。そんな場所はありません。もちろん、長く暮らしてみたいと思う土地はたくさんありました。けれど、骨を埋めようと思えた土地はない。結局、一番ほつとできるのは自分の国だし、自分の家なんです。

それは生まれ育った文化が大きい。同じ文化背景があればすべて暗黙の了解で行動できます。でも、違う文化ではそうはいかない。例えば中東で食事のときに箸を使えば、質問攻めにあいます。もしそれが毎日となると、やっぱりくつろげないですね。

誰しも、自分の生まれた場所がやっぱりいい。ただ、そこにあつてほしいのが、「当たり前」のもの。好きなことができる、水や大地が汚されていない。それらが失われたら、なんとしても取り戻すべきです。つまり、桃源郷は、探すものではなくて、自分たちでつくり上げるもの。なにも40年も世界を回らなくても気がつくことかもしれないけれど(笑)、旅をして、僕はそのことを知りました。



プロフィール●せきの・よしはる 1949年東京都生まれ。75年一橋大学法学部卒業。82年横浜市立大学医学部卒業。一橋大学在学中に探検部を創設しアマゾン川全域を下る。その後、医師になってからも20年以上にわたって南米の奥地を旅する。93年より「グレートジャーニー」をスタート。アフリカで誕生した人類が南米の最南端まで至る道のりを逆ルートで迎えるこの旅は、人力だけを頼りに10年の歳月をかけ、2002年タンザニア・ラエトリにゴールした。99年植村直己冒険賞受賞。04年からは「新グレートジャーニー 日本列島にやって来た人々」をスタートさせる。現在、武蔵野美術大学教授(文化人類学)。



毒を持った根を使って大量に魚を捕ったマチゲンガ族 ©関野吉晴